

朝鮮朱子学の特質—心に対する探究

金 光来（東京大学大学院人文社会系研究科助教）

朝鮮半島における儒教の歴史は古く、三国（高句麗・百済・新羅）、高麗王朝時代を通して国家体制や社会規範の確立に大きな役割を果たしてきたが、高麗王朝の末期に元（蒙古）から朱子学が輸入されて以降、儒教はその性格を大きく変えた。

朱子学の本格的な受容は、元の科举制度を導入したことに始まるといえるが、かくして科举を通して官界に進出した新興の朱子学者たちは、抑仏揚儒を唱え、徳治主義を掲げて、高麗王朝の内政を改革しようとした。

高麗から朝鮮への王朝交代期には、朱子学を奉じた改革派は政治路線をめぐって対立し、修己の学を重んじて体制内変革を志向する穏健派と、治人の学を重んじて易姓革命を志向する急進派に分裂した。やがて急進派は天命を受けたと称して李成桂政権の基盤形成に尽力し、田制改革を完遂した。朝鮮王朝の成立（1392）がその結果である。

朝鮮王朝は建国後ただちに科举を実施し、朱子学立国を目指した。成宗期（1469～1494）には、王朝交代期の穏健派の学統を継ぐ士林派が科举を経て政界に進出するが、権益を独占していた勳旧派は対立する士林派に対して、誅殺や竄流をもって応じた。戊午士禍（1498）、甲子士禍（1504）、己卯士禍（1519）などがそれである。

朝鮮朱子学は、度重なる士禍の結果、一挙に思弁的傾向を強めた。政治に幻滅を感じた士林が性理学理論の探究に沈潜した結果である。その後、明宗・宣祖期に至って在野の遺逸の士が多数登用されたことを機に、儒者は争って性理学の研鑽に励み、漢文学のレベルも格段に向上した。

朝鮮儒学史上最大の争点は、四端七情理気論にあった。いわゆる朝鮮性理学史における「四端七情理気論弁」は、人間感情の根源を理気論的に解明しようとした試みであるが、その起点となったのが、四端七情の理気分属をめぐって始まった、退溪李滉（1501～1570）と高峰奇大升（1527～1572）の間の論争である。李滉の四端七情論は人間の善性の証明を目的とし、人間の道德感情の根源を理に求める。すなわち李滉は、四端と七情を理と気に分属し、四端理発・七情気発と主張した（理気互発説）。これに対して、心性論における論理的整合性を重んずる奇大升は、具体事物における理気の「不相離」を強調し、李滉の理気互発説の理論上の齟齬を指摘した。二人の論争は、8年にわたる攻防の末、一旦終熄したが、その後おおむね奇大升の見解に同調する栗谷李珥（1536～1584）の登場によって再燃した。さらにその学説の違いは、李滉と李珥を学祖とする両政派の党議として機能することになり、論争発生以降約300年も続く、朝鮮儒学の一大テーマとなった。

総じていえば、朝鮮朱子学は理気二元論を朱子哲学体系の核心と捉え、四端七情論を理気論の要諦とし、理気論を中心とする枠組みを整えた。すなわち、李滉・李珥以降、二人の相異なる二つのテーゼ（理気互発説と気発理乗一途説）を基礎として発展し、二大学派（李滉後学の嶺南学派・李珥後学の畿湖学派）を形成したのがそれである。